

かつて勸行寺の庭は、ツツジが歳時を彩り、小径を發つたところからは、横浜の市街地と海が望めたといわれる。しかし本堂と床裏に囲い込まれ、床裏の座敷からしか庭を眺めることが出来なかった。

近年は、庭に出たり小径に登る方もなく、手のはいることのないままに、雑木が茂り、池は度々の崩れて岩や土に埋もれがちであった。だが、洞窟のうがたれた岩屋は高く、屏風のような姿と迫力は、遠い昔、門前までが海であったことを偲ぼせるし、常緑樹の中にもうれながらも、サクラやカエデが大きく枝を伸ばしていた。

裏山の小径から横浜を眺めたことのある茂木先生が、本堂の建て替えを期に「横浜駅からこんな近くに、このような自然が残されてきたことを、大切な資産として、生かし、蘇らせ、伝え残したい」と発心されたことが、庭内生の始まりとなった。

過殿無辺 鎮池平蔵  
知風来迎 折葵聚生

との文字が書き込まれた一葉のスケッチが茂木先生から手渡され、そこには、庭と本堂、庫裏とが一体となった勸行寺境内全体の世界が示されていた。深い緑の山、仏像が来迎する雲、岩岸とそこに穿たれた洞窟、庭の際までの池水、本堂の屋根の菱形、緑の中腹には古くからある石塔が描き込まれていた。灯のともった厨子は庭の中に置かれているように

もある。それは先生の考えた火迎図であり、庭のデザインの基となった。

調査から着手へ

造園の仕事は、建築工事の気配が未だ見えない頃から始まる。「植木屋さん」と親しまれる呼び名から、樹木を扱うだけかと思うのだが、その工事種類は実に多岐に渡る。樹木、草花はむろん、土、石、水、コンクリート、防水、左官、舗装まで、なんでもやる。箱根植木もそんな造園会社である。

平成十九年晩夏、まずは現況の調査がはじまった。樹木の位置と大きさ、池盤の起伏、土壌の質、池の大きさを調べる。移植する樹木の根巻きを施し、仮植えの準備がなされた。翌二〇年二月春の気配を待って、旧本堂解体とともに第一次工事として、裏山の整備、小径付け、ツツジの植栽、池・洞窟の改修整備、菅野石の敷き込みが順を追って行われる。第二次工事は、新本堂前面の植え込み、構えを決める大事な植栽である。

ツツジの大刈込みと小径

来迎図の雲海を表したいと、かつて勸行寺の歳時を彩ったツツジを使って斜面に大刈込みを仕立てた。花の色は雲をイメージして白から淡いピンクを主に選んでいる。小径は、十三重の石塔まで伸びて、その足元からは横浜の市街地が望める。柔らかな風合いの真砂土舗装に合わせて小振りの真鶴石による斜面の土留を施した。



▲実生の里松の移植と飛石による修景でイメージを交えた庭（写真：OPENHOUSE）



▲茂木先生による、境内全体を描いた来迎図



▶山にも重機が入り、開墾を完成する



▶木を移植しながら池を掘り広げる。ツツジの植わる中の土も取り除いた。右の写真（左）と左の写真（右）で黒線を植え替えているのがわかる



▶脚路を整備し、大刈込みをつくる